

2019. 10. 8 (木)

難民と考える人権の未来

テュアン シャンカイ

しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。（フィリピの信徒への手紙 3: 20-21）

難民とは？

きょうは、「難民イントロダクション」と称して、難民のこと、もっと細かく言いますと日本で暮らしている難民の方々がどのような生活をしているのかということをお話したいと思っています。

私の両親はミャンマーの出身で、私自身は1993年に日本の東京で生まれました。両親は1991年に難民として日本へ逃れてきました。私自身は、公立の幼稚園、小学生、中学校、高校を経て、難民を対象とした推薦入学制度を使って総合政策学部に入學し、現在社会人4年目です。

早速本題に入っていきたいと思いますが、まず難民と言われて皆さんどのようなイメージをお持ちになりますでしょうか。よく難民ってどういう意味ですかと聞きますと、まだ何も知らない人からすれば、やはりアフリカによくいる人たちですか、やせていて肌が黒いという基本的にマイナスなイメージを持

たれがちなのではないかと思います。加えて、今こそ難民という言葉自体は浸透していますが、あまりにカジュアルにとらえすぎていると思います。例えば3.11の影響で発生した「就職難民」や「ネットカフェ難民」という形で、何か少しでも困っているとすぐ難民という言葉が使われてしまっているのではないのでしょうか。多分皆さんの中でも、簡単に何か困ったことがあると「難民になってしまった」と言っている人がこの中にもしかしたらいるかもしれないですけども、そもそも難民とはどういう意味なのかと申しますと、紛争や人権侵害から命を守るために母国を離れ逃れて来た人、つまり「逃れて来た人」というところがキーポイントになります。

UNHCR が発表しました昨年度の統計によりますと、およそ7,080万人以上がこの地球上の中で難民と呼ばれる人たちになっていると言われております。

私の両親に関しましては、当時のミャンマーでは軍事政権だったために、民主化活動

に参加して、かつ父親の場合はそういった政党に所属していたことから命の危険があり、それで日本に逃れて来たという背景があります。

それ以外で言いますと、社会的集団、性的マイノリティですとか宗教的に民族、国籍、まさしく国によっては LGBT においてもそれが迫害の要因となって難民になってしまうというケースがあります。

日本で暮らす難民

日本においても、1980年代ごろから難民の方々は徐々に逃れて来るようになっていきます。現在のところ約2万人の難民の方々がこの日本にいますと言われておりまして、その数は年々少しずつではありますが増えています。

この棒グラフですが、難民の申請者、日本で難民として認めてくれという形で申請をした数になります。やはり2010年以降から徐々に増えていって、グラフは見えないですが最高なのが一昨年で、2万人近くの方がこの日本で難民申請されました。ただ、そのうち日本政府が正式に難民として認めた数は下の赤字で書いてある部分になりまして、昨年度ですと1万493人が難民の申請をしたところ、難民として認められたのがわずか42人という結果になりました。

難民認定者数を比較しましても、お隣の韓国でも118人ですとか、日本と同じ島国でありますイギリスにおいても1万2,000人ほどの難民の方々を受け入れていまして、この数字だけを比較しますと、いかに日本における難民の受け入れはまだまだ伸びしろがあると思いますし、とらえ方によっては非常

に少ないということが認定率からもおわかりいただけるのではないかと思います。

その中で、日本においては2万人、難民として認められた方がいるのですが、いろいろな形で難民支援の活動がされています。まず大学ということでも先に先ほどご紹介いただいた難民を学生として受け入れるということです。関学が最初で、2006年から始めまして、現在までに確か10大学ほどで難民の方を実際に学生として受け入れる制度が始まっています。

企業においても難民の雇用創出というところで、有名なところだとユニクロのファーストリテイリングですと難民の方をフルタイムの社員として雇いまして、日本語での実務研修もしっかりしつつ雇用を創出しているという事例があります。

学生においてもさまざまな形での難民支援活動が行われておりまして、この後紹介しますが関西や東京で学生さんによるさまざまな難民支援の啓蒙活動を行っています。

難民当事者の話

簡単に私のバックグラウンドをお話したいと思いますが、1993年に私は生まれまして、そのときには両親は難民申請の仕方わからなかったためにオーバーステイになってしまっていました。その状態で私が生まれたことによりまして、簡単に言いますと出生届を日本の役所にもミャンマーの大使館にも出せずじまいになっていまして、外国人でしたら絶対に誰でも持っている在留カードの国籍欄には一応ミャンマーと書いてあるのですが、私はミャンマー人であるという証明書ならびに日本人ではないわけなので、そういっ

た自分の身分を証明するものが一切ない、いわゆる無国籍状態で今日まで過ごしてきました。

特に困った点はそこまで多くはないのですが、難民として認められたのが2007年で、私が中学校1年生になってからなので、その間は保険証も一切持つことができませんでしたので医療費は全額負担で払っていました。特に父親も難民として認められるまでは来日してから同じ会社で15年強働いていたのですが、その間までずっとアルバイトで働いていて時給も一番安い階級のまま、15年も働いていれば何かしら昇給とかボーナスなどが出るのが当たり前なのですが、そういうことも一切なく過ごしてきました。

無国籍と言いますとピンとこないと思うのですが、簡単に言いますと、いわゆる透明人間だととらえていただくのが一番わかりやすいと思います。皆さんは日本人であり、外国人の方もいらっしゃると思うのですが、パスポートがあって何かしら困ったら絶対に国に属している国民なので助けてもらえるのですが、私の場合そういったものが一切ないので、ときによっては困難を極めることがあります。

少なくとも日本社会で過ごす上では住民票も取れますし免許も持っているので日常生活をする上では問題ないのですけれども、ただ、海外に出国する際には難民として日本で生まれた子どもたちはほぼ例外なくパスポートを持つことができないので、再入国許可証といういわゆるパスポートもどきのもので海外に行かなければなりません。ただ、その書類も日本政府が発行しているものなのですが、私の場合国籍のところにはミャンマーと書いてあるので、例えば海外に行った場合に

はそれが真っ先に偽造しているのではないかと疑われてしまいます。

難民二世で私と同じ境遇のベトナムの人がいるのですが、再入国許可証を持ってアメリカに出国したところ、アメリカの空港で引き止められてしまってそのまま帰って来たという事例もありまして、日本で生活する上では困らないにせよ、やはり一步海を渡ると非常に大変な思いをしなければいけないのが現在においてもあります。

私は今年26歳になったのですが、出生届が出せていないということで結婚することが一切できません。なぜかと申しますと、外国人が結婚する際には独身証明書というものが必要になるのですが、私の場合は日本にもミャンマーにも自分が生まれたことを証明する出生届が出せていないので、一切そういうものを取り寄せることができないという非常に難しい問題があります。

先ほどの学生のさまざまな難民支援活動ということで、こういった取り組みを私が在学中に始めました。簡単に申しますと難民を知って支えるということで、難民の故郷の味を実際に大学の学食で導入して1食当たり20円が寄付金となり、それが日本に逃れて来た難民の支援活動に充てられるという活動を2013年に立ち上げまして、現在までに全国で40大学ほど、今6年目なのですが全体を通して大体150万近くの寄付金が日本に逃れて来た難民の支援活動に充てられてきました。

この関西学院においても、11月中に上ヶ原、三田のどちらでも導入が予定されておりますので、ぜひ興味を持って一度召し上がっていただければと思います。

難民と共に歩む未来

難民問題の解決はもちろん難民を生まない世の中になるのが一番の理想形ではあるのですが、まずその方法として難民を生み出す問題の芽を絶つこと、例えば国家間の交渉や平和外交で解決を目指していく。あとは国内に取り残されている人、周辺国に逃れた人を支援することも解決に向けての大きな一歩だと思えます。しかしながら、平和で安全な国で人生を立て直したり次のステップへつながら支援をすることで、あした難民がゼロになったとしても、3年や5年は祖国へ帰ることができません。特に日本にいる2万人の方々ほぼ生活基盤をこの日本に置いている方々もいっぱいいますので、どうやって平和で安全に日本で生きていくかということをぜひこの話を通じて考えていただきたいと思えます。

先ほども聖書の箇所を読んでいただきまし

たが、今後日本はもっと多様に富んだ国になっていくのではないかと私は思っています。今まさしくラグビーワールドカップが行われていますが、日本人でなくても日本国籍を持っていない人でも日本代表になれるということで今がんばって勝ち上がっていますが、今後、このような構図がラグビーの中だけではなく日本国内においてもそうになっていくのではないかと思います。ですから、難民の方々はもちろん肌が黒くてやせている人もいっぱいいると思いますが、それに限らず、難民ならではの長所もいっぱいあると思いますので、そういうところを共有することによって、日本で暮らしている私たちが足りない点も補えて、よりすばらしい人間性が育まれ、よりすばらしい国家になっていくのではないかと思います。そういうことを通じてこの難民問題もぜひ難しい問題ととらえるのではなく、前向きに、親しみを持って接していただきたいと思えます。

(関西学院大学卒業生)